CROSSROADS

KITO IN-HOUSE MAGAZINE
No.55 April 2023

We Make Hoists
漁業船団をバックアップするキトーのホイスト

True North
仕事の幸福度

People
“働きやすい環境づくりは、自ら率先して行動することです”

Topics
ご当地グルメをご紹介！

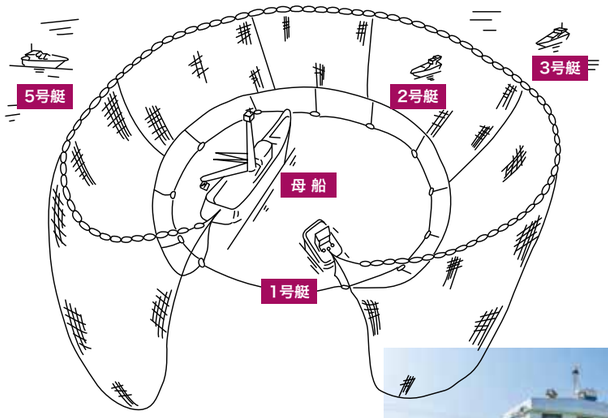
写真：海外まき網搭載艇 かぐや姫号
聖人堀鐵工所（宮城県石巻市）

漁業船団をバックアップするキトーのホイスト

We Make Hoists

**今回の取材先は宮城県石巻市にある聖人堀鐵工所（しょうにんぼりてっこうしょ）、アルミ船を造る工場です。
テレビを見ていたら、キトーのホイストがアルミ船の底をひっくり返す作業に使われていました。
さっそく取材させてもらえないかとお願いしたところ、快く受けていただきました。**

聖人堀鐵工所では、海外まき網漁船に搭載する小型の船を造っています。製造の現場には、船の骨格と外側を形成する「船殻（せんこく）」と、エンジンや各種装備を取り付ける「艤装（ぎそう）」の工程があり、それぞれに4〜6人がチームを組んで完成まで関わります。1艘を仕上げるのに5か月くらいかかり、1号艇から5号艇（漁師さんは縁起を担ぐので、4号艇はありません）までの4艘をセットにして、納めるケースが多いそうです。



船底にある3本の筋が特徴の1号艇。それに比べて少し小ぶりの2号艇から5号艇は、魚が逃げないように網の外側でサポートします。

海外まき網漁法

海外まき網漁船は、3〜4艘のボートを搭載して外洋に出て行きます。そのボートの中で最大の1号艇は、漁船の船尾に積まれていて、かつおの群れが発見されると、網の片方をつけて海に下ろされます。漁船は群れを大きく取り囲むように旋回。かつおの群れを網で取り囲んだら、素早くリングに通したワイヤで網の裾を引き締め、袋状にして閉じ込めます。船の上にすくい上げられたかつおは、船内ですぐに凍結されます。日本有数の焼津港や枕崎港から漁場までは、片道約1週間の航海。魚群に当たったら、一攫千金のチャンスかも！

「アルミ船製造のノウハウや技術を次の世代に受け継ぐこと。　それが私の役目です」

今回の聖人堀鐵工所の取材は、柿沼孝使社長のご厚意で実現しました。アルミ船の特長や、海外まき網漁について、いろいろと教えていただきました。

聖人堀鐵工所の由来

聖人堀鐵工所は1949年に鉄工所として創業し、1953年から造船に関わり始めました。アルミ製の船舶を手がけるようになったのは、1980年のこと。以来40年にわたり、アルミ船の加工技術やノウハウを培ってきました。社名の聖人堀（しょうにんぼり）とは、旧北上川が太平洋に流れ込む河口部近くにあった、堀の名前に由来します。その堀は、一時蓋をして遊歩道になっていましたが、震災後にかつての姿に戻されました。

職人のプライド

搭載船は、軽く、錆びにくく、頑丈であることが求められます。1枚のアルミ板から自動切断機で船の骨と外板の部分を切り出します。部材によっては手作業で行うこともあります。アルミは鉄に比べてやわらかい特性のため、特に溶接はむずかしく、技術や経験が問われます。船底の板に格子状の骨組みを溶接し、外板が貼り付けられ、エンジンや操舵室を取り付ければ完成。腕利きの職人たちの手によって、頑丈な船に仕上がります。

ふるさと石巻

現在では海外まき網漁船の搭載船のほとんどを聖人堀鐵工所が製造しており、お客様は九州から北海道まで全国に及んでいます。石巻港付近は水深が浅く、大型船が入港できないため、海外まき網漁船を石巻で見かけることは残念ながらできません。一方、石巻魚市場は全長876メートル。世界最長の魚市場としてギネス認定されたそうです。聖人堀鐵工所も、石巻魚市場も、大津波の被害を乗り越えて、がんばっています。

Memory of 3.11

石巻市震災遺構　門脇小学校

2011年3月11日14時46分

東日本大震災が発生。

学校にいた児童と教職員は訓練どおりに日和山へと避難。

地震から約1時間後、大きな津波が襲来。

津波火災が発生し、門脇小学校の校舎は炎に包まれました。

門脇小学校は大災害の記録や教訓を伝承する震災遺構として、

災害から命を守るための避難行動や、平時における訓練の

重要性を学ぶことを目的に公開されています。

隣接する展示館では、被災車両や仮設住宅も展示されています。